

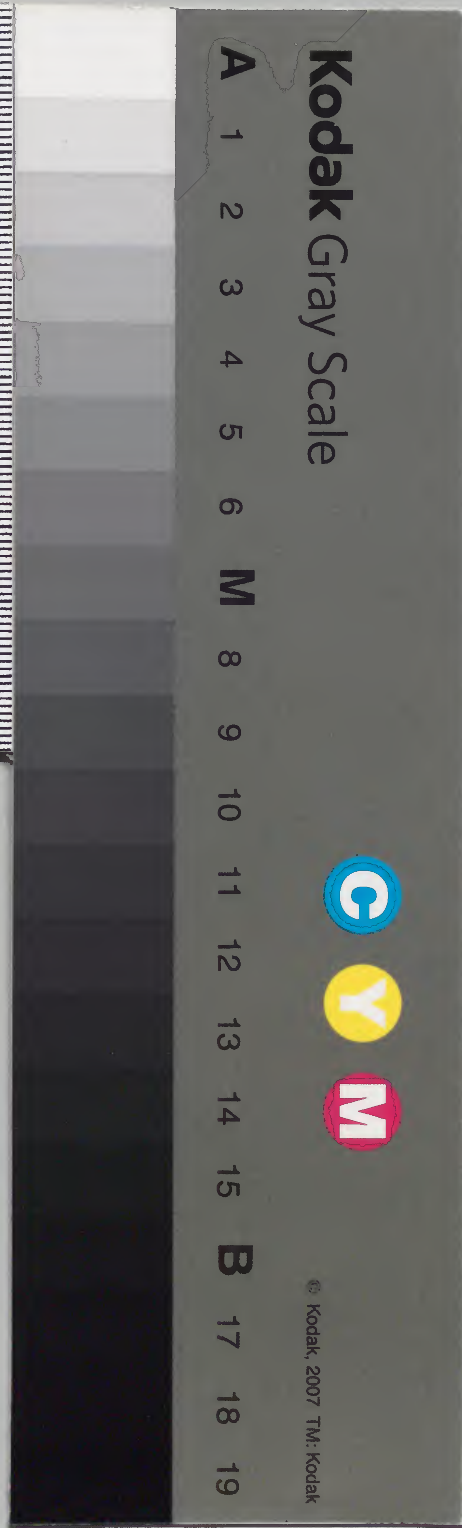
農稼業史

一

内務省圖書
 第一二八九番
 部.....號
 五.....冊

太政官文庫
 和書門
 八二七
 五六七
 類號函架冊

内閣文庫
 番號 和 8247
 冊數 5 (1)
 函號 183 90



施本 湖東 耕雲舎藏板

農稼業更

世書と全邦三卷より上まの括他奥の農家必の要と消録
より中まの穀類三草山野菜の類下まの草花竹木の類
ふ繁まの身も米穀を借國一統の度く作ら物うれは上まを毎
所編成に於ては但一冊とすより二冊とす一冊は行書小
編を一冊と編まを記し進く修作とす一冊

右 大坂と信吉の乃今官初家南の
神教痲摩護園業店より出之

農稼業更自叙

夫天地の中陰陽昇降して万物を生長
故小鳥獸魚虫の類草木に生ずる
冬、雌雄を配りて草木を
世の人々、雌雄を生きて以て穀を
灌漑の類、雌雄を配りて人々を
有るの類、雌雄を配りて

農稼業更 耕雲舎藏板

中一付一ど故一作也却一盛をより
 取実少く或を種ら一とらセ食の
 種と適きと一ゆり作也の種子
 をふくぬ人をも一又種子ぐ一
 固く名物の種子と求む一
 一より此種子と用い一とらく此病と
 変一と多一又と陰陽不順の業と

天地の恵も一いが一固
 年一土年の一より農の一に一用い
 身勤一五穀作一少一
 雌雄と一知り作物一よりて一
 損益と一り一様一と一
 一又一季一此運一氣一土一入一
 一病一入一と一農一作一得一

弘く教ヶ年のるまは此果と為大小種いしよけ三の下の
 名実うとく年く子種しと久子種を共い今いそちの
 を用ふる人も稀あり種子も時とちりそのなりせ
 たり予曰お種子小とやうをせりよとふし色令後く
 種子のえびさく種をまのち地ふらとてゆあり前の
 人も終一極をまきともとて持ゆり種ふれまの下の
 自体ともよ教ヶ年のる大小利を得らまきしとて
 どもまふ述らまきとてのちのえびさく又まきも
 同一田よりえとて更まきとてのちのえびさく又まきも
 ふ種よおよびしとてけりけり何れどいげまもかくのち
 りりそ年くふ種とてまきとてまきとて多し色をばま
 けまのちしとてまきとて朽の固益なり農ま種合ゆて
 名実のをつらまきとて

孫 徳重述

農稼業要目録

稲作の部一の巻

- 早稲雄苗穂の事 兼 圖 ○苗代の事
- 苗代こやしきいやし ○種まきくひり
- 八月稲付肥しきり ○八月も初め
- 八月あか減のり ○田草採中此事
- 用水水三日の事
- 中稲雄苗穂の事 兼 圖 ○中稲雄苗穂の事 兼 圖
- 中稲雄苗穂の事 兼 圖

○玉極とくし種たねの事こと 女メ園の ○種子たね留とどの事こと

○いん地ぢの事こと ○濱田はま乃の事こと

○八月はつ早はや冠かんの事こと ○かゝ種たね地ぢふふ苗え種たねの事こと

○諸あつのい種たね子こ取と種たねの事こと ○秋あき種たね留とどの事こと

○新あたら種たね掛か干か漚あ用ようの事こと

○ささらら出で来きぬぬ種たね留とどの事こと ○種たね留とどの事こと

二の巻

○新あたら種たね急いそ干か云い造ぞう化かのくわ因いん女メ辨べん解げ

三の巻

○農人のうじん事こと心こころ得えのこと 女メ七しち條じょう

女メ棉わた作さくのこと部ぶ 四よのこと表へい

○女メ棉わた種たね子こ雌メ雄オ撰せんやりれこと変へん

女メ雌メ木き雄オ末すえ因いん女メ辨べん解げ

附録 五の巻

○虫むし化か変へん女メ去き術じゆつ

○時とき旬じゆんのこと考こう女メ棉わた地ぢ畦し刻こく

目録終

○前編 魚干を造化の圖を辨解

中の巻

○五穀の類 十三種

○三草の類 八種

○菜の類 山野菜の類 三十八種

右の内、小麦、小麦、蕎麥、蘿蔔、芋、菜、糸、綿、糸、の六種は、
おのゝ雌雄の圖をいへば、
雌雄のえび、又ふとこを密付する、
同、
よりてとく、
條下に圖画と、

下の巻

○草花の類 十八種

○菓木の類 十種

各種類毎小図
画

○諸木の類 七種

右の外諸木育枝挿木養標本の傳。法本花鳥生怪乃
法蘭柳松も入行の時種とありて又凡のよとあり

目録終

し書と前披紙書に述べて予が祖父

農家不益の事人々不考の事一諸作小

利を得るは採考一教十年を記し

編輯し母より人々一けふいふ事

其素よりして没を予けしは祖父の

志の申道しる事しんは其の

上之巻毎階級と稱し編終中ふりしぬ

是を看る人々祖父が考はわしき安ん

厭くば母のまゝに唯採り考へられしを
 想像を功とせしむるも其の功は
 能く懐くは方角く教へるは必も
 利と其の功を以てし且け書、又拙く
 せしむるも唯其家利を以てし是と
 爲るは祖又が志と事と澁意とを憐く
 母の功を以てしは其の功は
 孫 徳重志

早稲唯苗穂の事図

図のくくとも
 みて二両同
 穂も穂先採
 てりり毛別
 唯穂より紐
 穂子採出
 秘傳のり



農務業

早稲

一

十^{ごう}分^{ぶん}熟^{じやく}して末^{すえ}四分^{ぶん}と種子^{たねこ}は用^{もち}ひべし。中^{ちゆう}も
 長^{なが}き抽^ひばえり出^いして。同^{おな}末^{すえ}四分^{ぶん}とえり。元^{もと}末^{すえ}
 もに根^ねりふとりて。中^{ちゆう}の粒^{りゅう}を早^{はや}稲^{いん}の中^{ちゆう}播^まぐ
 故^{ゆゑ}に熟^{じやく}とるに速^{すみ}速^{すみ}あり。粒^{りゅう}多^{おほ}し。又^{また}花^{はな}の盛^{さか}
 穂^ほのわろし。も播^まぐ。少^{すく}少^{すく}の風^{かぜ}もかろし。但^{ただ}
 痛^{いた}又^{また}末^{すえ}の粒^{りゅう}播^まぐ。又^{また}青^{あお}玉^{たま}もまろかり。右^{みぎ}の如^{ごと}く
 昨^{きのう}種^ねとえり用^{もち}して。一^{ひと}方^{かた}は難^{がた}なく名^な実^{じつ}多^{おほ}し。然^{しか}ら
 中^{ちゆう}に種子^{たねこ}を多^{おほ}し。元^{もと}と始^{はじ}末^{すえ}と。一^{ひと}方^{かた}は種子^{たねこ}に

取^とりも。又^{また}播^ま種^ねとた。ひよゆふ。その年^{とし}を
 去^こる。苗^{なえ}より。穂^ほえり出^いて。つし。く。み。り。も。
 少^{すく}なり。も。撰^{せん}出^{しゅ}。別^{べつ}な。種^ね。並^{なら}ぶ。い。も。種^ね。並^{なら}ぶ。い。も。
 以^{もつ}て。少^{すく}なり。も。早^{はや}稲^{いん}を。陽^{やう}ちり。乾^{かわ}地^ちよ。し。石^{いし}出^で
 中^{ちゆう}に。早^{はや}稲^{いん}の。田^で地^ちよ。種^ね。と。し。山^{やま}田^で南^{なん}けの。田^でよ。し。
 日^ひ高^{たか}り。に。し。陰^{いん}地^ちよ。い。も。早^{はや}稲^{いん}。上^{うへ}地^ち陰^{いん}地^ちの。下^{した}
 中^{ちゆう}に。通^{とほ}ぬ。あ。い。も。種^ね。と。換^かひ。の。方^{かた}ちり。雌^め苗^{なえ}は。陰^{いん}
 少^{すく}く。母^{はは}なり。母^{はは}より。子^こと。産^うむ。の。ゆ。へ。昨^{きのう}の。実^{じつ}は。自^{みづか}ら。小^{ちひ}

二分とうえ付入七中入りてよ。け二か
 子稲より晩稲まづくに日宛順く順く
 かくのぶくくしては古虚るころ。溝くも
 なく。苗盛く生立く育殊ふよ

一苗生立くよりのぬまの糞く夕新よころあせよ
 日中よしてはいもらの入基なり又苗代地肥る地は苗代
 中せざるおもなり又えて後田地へ中一出来ざる
 地もあつくたのまざるおよ苗代と十石よ肥く
 とも苗をうゆら古地もありまきも是をまきまき
 した代糞まきるとちまきばかくとくりくは苗お
 の生どるこなり

種子蒔事

豆より蒔りよ。稻より九つと一陽して。種子
 動く悪く。豆より蒔りよ。種子動くよ
 かくか〜〜〜。斑く〜〜〜。苗立よ。込苗も
 ちくのぼる苗れく。まづく株ころい。先採
 しく。ゆきの地ようえくも。盛出〜。苗に。
 いもら入〜。若あまわ〜と能無出〜。さぬ
 ぬ。其葉けを用〜。又序きいもらよ。若る麦

うら上うらに少すくく並なてもよよ。又また廁つれへ入いれ並なかけらも
よよ。三さん日にちの内うちよよいいららささははるる。

二月種付の良肥うゑつけしき入いる

種付うゑつけの良肥よきしきしきをを所そのところの格かくししくくを
勿な痛いたなりなりととししもも乾地かわみちをを履ふききももてて中なかよよ。又また
燒耐やきにの物ものももしし。油あぶらををしし。諸もろの干かわ編ひの敷しきはは。
俵たわら是これををききつつくく損とんの方かたなりなり。雜ぞう中なか好このししかかららはは。
石土いしつちの地ちへへ一いつ切き備びへへのの六む角かくしし。湯ゆの地ちをを示しの

格上かくじやう中なか可かなりなり又また陰かげをを踏ふききくく底そこふふ冷ひや氣きはは

ある田たをを。燒灰やきはい多おほむむどどの莖くきををしし。山田やまのた目めととん

ぶぶの所ところももけけねねしし。泥田どろのた原田はらのたよよいい。山やま芝しば若菜わかしなをを入いて

しし。濕しづのの不ふ韮にら中なかよよ。雜ぞうしし干かわ編ひしし。

大豆まめしし。猪油ぶたあぶらののよよしし。俵たわら猪油ぶたあぶらののよよしし。田た地ちの

たたりりよよ魚いししし。地ち昔むかしよりよりへへ湿しづくくにに土つちをを中なか

ありありままううれれとと。土つちををままななりりはは方かたなりなり。冬ふゆ作つくのの田たを

耕たがふふ。方かたのの地ち味あじよりよりららぬぬ。おおいいづづ深ふかくくととららううり。

六年の内を一年とせしめて六
 年とせしめて六次耕す。其の地味とるを
 又耕する地もけのちぬり。六月の耕す肥
 たる地はあつてはよく。又をせざる地を
 耕すはよく。あつてはよく。又をせざる地を
 又土肥和らうにせしめて上地とせしむ。又田の
 水は其所を地よする。これと記さば
 一斗も。稲より。又とるくの記とせしむ。

六年の運ぶもよし。田にふる。其の
 地味とる。又土肥和らうにせしめて上地とせしむ。又田の
 水は其所を地よする。これと記さば
 一斗も。稲より。又とるくの記とせしむ。

入月も初の事

種初とも初又のきりきりきり。是れまぐの格とい
 遠い。米の粒に首をもも初小粒をい。
 田地よききりしきりしきり。のちのち二百歩に
 八十把の割を移す。他代をかきしきり。田を
 田を移す。すきりすきりすきり。格をすきりすきり。すきりすきり
 けり厚さすきりすきり。陽地肥地の格をすきり。陰地
 瘦地と厚さすきり。又子稻の格をすきり。すきりすきり
 苗の腰式をすきり。格をすきり。すきりすきり。すきりすきり

忘るる。首の格をすきり。すきりすきり。すきりすきり
 一稲の苗向すきり。風の要と。是れ是れ油ひきり。すきりすきり
 並より十日もすきり。能熟しきり。すきりすきり。すきりすきり
 入田水が減の事。是れ用おきり。すきりすきり。すきりすきり
 大粒の格をすきり。すきりすきり。すきりすきり。すきりすきり
 其候水と格をすきり。甚悪し。すきりすきり。すきりすきり
 畦よ。是れ格をすきり。水と格をすきり。すきりすきり。すきりすきり



水よわたりふやりにとどろく。水よわも冷
 味を根にしみ。苗不足して痛む。さうよ
 苗のちびなをどろりたり。殊に苗のみよらば。
 大月より夏の水は右の極なり。土用水は右の
 水は浅水よとどろく。水よわたり。さう
 水よわたり。田比ふあつたり。水よわたり。さう
 葉とみち。秋ふたり。水よわたり。稲伏じ。
 水よわたり。根にしみ。水よわたり。さう
 子笑う。暑気よりの秋は實とどろく。さう
 水よわたり。さう。水よわたり。さう。水よわたり。さう。

水よわたり。さう。水よわたり。さう。水よわたり。さう。

一、ほろとつらつらめは採る。根多きを田に入
 りやりて草は見えざるに田に入べし。草を固
 めておのをもとや根をいじらうとせらる。扱
 草の採やう。初は右の方より採中よりを左
 より採。又三處採へてより採る。又四處人
 むかへん。ほろまんのごとく次く四方より採べし。又
 編採とよけくも採べし。あま採と田は移る如
 く。是はあまひさみのつらとがさる。つらと
 埋

二、しづくとくは浮根は草もろく。苗は根
 の種もゆきほ。又田比の並もよくなりてむてり
 草も苗いじりてれし。又水落をせり
 けし。もゆきとさるなり。扱草は扱通採はほり
 草の。其二と草いじりて先草生ぬ草は採ゆ。
 草はさゆ。さゆもさる。さるもいじりて。第一
 草に糞とさる。草は地わくぐ。草は菜
 五子。又まらる日敷の子けさる。草生五ぬゆ。

農家集 卷一

唯かきさぐさのしめす。たし採穀多くも造
 作らうべし。又採穀ときき。式を採ふおふれ
 て。第の根より。一過採も造作しく。採子目穀を
 かり。杖のち実も又少し。又第の生ぬを這入
 ぬ。田の幅を出来さるる。少くといく第の穀
 通さるる。利がある。は初べし。又陰陽不順
 して。いりら中食のよけふ。世にかりが。爰ふ
 玉板の秘傳あり。百姓の先是と。坊人ちあき。麦と

作らうべし。毛刈病と去の一葉より。け。葉は出さ
 かり。並い。さら。又虫のけ。さる。も。能。煮。出。し。用。ふ
 ぬ。し。ま。こ。も。候。廁。へ。入。並。儲。の。立。毛。ふ。う。け。く。
 第の虫喰。候。ま。は。と。救。し。難。と。道。なり。又。田。地
 中。と。も。費。用。さ。り。俵。ふ。色。も。田。の。あ。口。よ。堀。入
 上。の。方。と。同。に。埋。ぬ。し。い。ん。と。か。き。は。田。地。を
 廣。く。し。め。さ。る。ま。が。も。は。げ。さ。る。り。又。虫
 け。も。若。棟。の。葉。も。よ。し。色。も。又。百。目。糸。り。俵。よ。入。糸

の色上の方と岡に埋くす。又け二泊しめき
 ざる虫と甚稀うしむも。あま去るぬるとえおなすんば。
 鯨の油と用ふべし。毛虫よはとるき毒油みく
 忽よ去べし。油しゆ更まらりては紅せう一い反はんふふをを并へぐぐとと横よこり
 多おほくのおほくくいい甲かよよ水みづとと八は九くちちよよととりり並な稻い葉は
 よ湯ゆ盛みし。む日ひ勢せいつつくくあ湯ゆののどどくくなりし
 何なに刻くよよ。湯ゆ中ちゆうのの小せうとと何なに貝かいもも竹たけとと捷せつ貝かい
 枚まい子ののどどくくふふ。或あるいいととををるるれれ火ひのの火ひ四しととももは。

独ひとり分ぶん量りやうととととり。満まん通つうふ湯ゆべし。ととぐぐににもも人ひと不ふ續つづ
 て細こととああけけてて竹たけとと稻いのの葉はをを水みづ中ちゆうふふてし
 倒たふくく。或ある人ひともも洗せんべし。毛け別べつ迹せきののむむとと中ちゆうとと殺ころと
 かり。又また藤ふじののほほににももゆ。稻い葉はよよととりりけけく
 ととりりももしし。けけははふふああひひててもも慎しん蟻ぎ。毒どく。蟻ぎ。賦し。その外そ
 いいくくもも蛇へびとともも忽たちふふ死し進しんふふ去さべし。蛇へび示しるる洗せん
 じじとと後のち水みづとと洗せんべし。又また新あらたなな水みづとと入いべし。右みぎ之の種たねのの葉は
 下したののめめいいりりらら虫むし喰くいいづづききのの種たねとともも造つくるるゆゆとともも毛け

他人の田の第一うらむに書くはるるはるる

一畝の油意にそのはざる亦とて種ゆも志す一うらむはるるは
先色と用ふるもよし又密せるこの多きと出地とたこの
草は多くあつた苗代地こゝのけを右の登又さばり
一切苗代の地は多く入かこゝに並のら種よとまじり
い畝いなる田は種も密のせるこれ

中稲唯苗穂のより并図

末しく二筋ほど種よ種先物々浮根とくく
立根多し。種よ久大雨久風もほしく又種ら
いり早種もいしと種。此種の中とて

早稲

中稲

晩稲の

うらあり。

末三分は

早稲の気。

中三分は中稲に

先うら元三分は



晩稻の気なり色とあり。色は多く熟すと
り遅し。四粒の穂もろろ同。四粒もよ
と急三分種子に用いしより

但種子と撰むるに掛りぬ。穂はうけおれ穂をさきとすて
えりちりちりとの穂はゆきまきて二筋のうらやりに穂先の
指ししはしりしにさきさきとすて三分ははしりしより

中稲雄苗穂の事并図

園れどく末めより一筋長し。色別穂穂之種子
よと悪し。浮根多く根根とくれ。根よわし

の早も苗
いし。まこ
穂ふらかり
すしゆん杖
穂をみわあ
穂大るよ
まけるうら
又いもち虫
入をく。その外雑生トやと



玉粒晴き穂のつり年圖

未とて日極ふ

三筋揃ふて

多げ穂百の

内と一極ふ

け種子と撰

ちて用ふ

む久よとて是と



玉長也

此の中より変り出づ穂多り。右子稲。中より
 奥より穂。田種ともいへ穂の貌日ト。子稲ハ陽に
 中稲を陽中の陰より。奥稲ハ陰に陰小稲
 一穂ト。陰に穂を陽なり。乾地。陰ハ左地
 虚地。右ハ麦地。石地。右の地ハ魚ト。採り。陰
 平田ト。何れも穂也。是又雌の穂と擇出
 月ト。一穂ハ雑中魚ト。右四種ともいへ
 と申す。割限も。そのよとてとて。益より書

方まきりの内し。置るより書方まきりと。陰
しして種子勅くむる。おより九つ時まきと。
種子勅くて魚し。雨踏ふ若り

種子替のり

物種子へ。我村の種子も用うるといふ。西し。
勿備家里より東小の種子を中く魚し。
小の方の陰かり。東れ申もよりし。かきびを村
より南の方よりよれ種子と替るべし。種よ

運風の順にまきより替りてい。米作よ
かきびの作の化よの豊かきべし

いん地の事

毎の同トよのなれ種くとも魚し。早種を
いん地まきとてい。まきくすりて去
体いゆらり。子種を子候もとてい。種を
みのぐり。肥し強かり。い道程してい。地
うまはるるやりに思へども。田地の替りもあつと。

甲福もめづりしとて地も移りてはし。是を
 用いざれば中福晩福とも。毎年我是とて
 連々の不化ともなり。けは授を菊はいや地よ
 うゆる時を。何れど肥しとてくも。花小く
 色悪し。かやれ地をき尺どなりとて。其除
 けしと入替りては。花又ふりて
 色殊ふりて

濱田の事

一上巻ふ出せり。目録の色中下れき。いづれをてはよく
 全備して出せり。これれも種数多くして。其難
 よ及びし。細部を約し。ながく。地よ。農夫の口すこと
 と。なり。農益とも。なり。が。は。中。ま。ハ。穀。類。を。初。め
 ち。外。三。系。山。野。菜。の。類。を。く。く。情。の。多。き。地。ハ
 二。種。式。と。三。種。又。と。入。種。七。種。を。抜。摺。し。て。述。ぶ
 能。事。と。し。て。一。又。下。ま。ハ。草。花。林。木。を。わ。ら。二。冊。と
 せ。り。も。又。述。ぶ。出。せ。り。

文化十一年のえ成歳穀板

弘新

大坂とていふ所の今宮新家南口

神教病摩護園茶店

